みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

Systematic Study of the Shirofumitageta Wooden Clog used in Rice Paddies (Japan)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中村, 俊亀智 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004662

シロフミ田下駄の諸系列

——用具論的に——

中　村　俊亀智*

Systematic Study of the *Shirofumitageta* Wooden Clog used in Rice Paddies

Takao NAKAMURA

Shirofumitageta or rice field clog is a kind of farming implement in the shape of a frame. In the cultivation of rice fields, *shirofumitageta* is employed for smoothing the surface of the paddy after ploughing.

Generally speaking, it is used for the following purposes:

(1) Smoothing the surface of the paddy

(2) Supporting farmers' feet

(3) Fixing young leaves and grass under the water as fertilizer

This is one of the oldest basic farming implements used in rice cultivation.

The four forms of *shirofumitageta* are as follows; it should be noted that there is a correlation between form and function.

Form \ Function	(1)	(2)	(3)	(Plate)
I	x			1
II	y	x		
III	y		x	2, 3, 4
IV	y		x	5, 6

(x refers to major function, y to auxiliary function)

* 国立民族学博物館第4研究部

Ⅰ．問題提起
Ⅱ．形と用法
1．岩手県沢内村のオーアシ
2．千葉県九十九里のオーアシ
3．埼玉県越生町のオーアシ
4．八王子市柿ノ木平のオーアシ
5．岐阜県国府町のオーアシ
6．長野県穂高町のハコゲタ
Ⅲ．むすび
余論　出土遺物との対応

Ⅰ．問　題　提　起

民具を研究しているひとたちのあいだでは，田仕事の際に履く鼻緒のある大きな下駄のような履物のことを田下駄と総称している。

これまでの調査によって，田下駄には，田のシロフミのときに履くシロフミ田下駄（一名オーアシ）と稲刈のときに履く稲刈田下駄の２つの種類があり，シロフミ田下駄を稲刈にも履く例がないわけではないけれども，一般的には，この２つの田下駄は形のうえでも使い途のうえでも，判然と異なることが知られている。

また，これまでの研究から，シロフミ田下駄の型には，すくなくとも形のうえで，枠型の大型，枠型の中型，枠型の小型，そして，箱型の４つがあるらしいことが知られている（なお，このほかに輪標型があるらしいが，ここでは触れない）。ここではひとまずこの型区分が成立つものと考えよう。

この小論は，これらの４つのシロフミ田下駄が，それぞれどのように使われていたか，シロフミ田下駄の形や作りはその使い途・使い方とどのように対応するのかを，旧民族学博物館所蔵の標本の整理から得た体験をもとにして，具体的に確めてみたものである。

その結末を紹介する前に，上記のシロフミ田下駄の形のうえでの分け方，ないし，使い途との対応などを追うときの留意点といったものを列挙しておきたい。

(1)　シロフミ田下駄は，枠と枠にとりつけられた足板（鼻緒のすげてある板），それに，下駄全体をもちあげるときの縄（いわゆる手縄），枠を強化するための横桟などから成立っている。枠は木の板か角材でつくられているが，枠が幅の広い板でこしらえられていて，下駄全体があたかも箱のような形をしているシロフミ田下駄のことを，箱型のシロフミ田下駄と呼びならわしている。

(2)　小論では，仮りに，枠のタテの木をタテ木，ヨコの木・横桟をいっしょにしてヨコ木といい，例えば枠に３本の桟がいれてあるシロフミ田下駄があるとすると，この田下駄のヨコ木は５本ある，といったように表わすことにした。

(3) 枠型のシロフミ田下駄（枠を比較的幅のせまい枠か角材でこしらえた田下駄）には，大きさの点で3つの型が区別できる。大型は，タテおよそ80cm以上で，きわだって大きく，ヨコ木も9枚ないし，枠を角材でつくってある場合でも6本のものがみられる。タテ木・ヨコ木・足板それぞれの接合にも，若干の工夫がなされている例もすくなくない。小型は，これに対して，タテ40cm前後で，例えば，長野県上伊那郡旧朝日村平出のコカタゲタなどがそれに含まれよう［AM, 1937：pp. 202—204］［文部省史料館，1970：p. 6］。そして中型には，大小2つの型の中間にあるタテ50ないし60cm台のシロフミ田下駄をあてることができよう。中型はヨコ木の数も3・4本で，作りも大型にくらべていたって簡素である。

(4) シロフミ田下駄にも地域によって，いわば地方型というべきものが行われている。東海地方の一部や飛騨地方では昔から，寸法の点では大型に近い，しかも，ヨコ木の数では3ないし4本（うち2本は細いタケ）で，タテ木や足板のうしろ部分が長くつきでている型の下駄がつかわれている。そこで，小論では，この中型のシロフミ田下駄が他の中型と果して形のうえだけの違いなのか，それとも操作法，シロフミ作業の内容にまでおよぶ違いなのかを追ってみた。

(5) 調べ，または，分析にあたっては，まず，シロフミ田下駄の形を確実におさえておくため，全体の寸法や重さを計り，各部材の寸法や形，部材同志の接合型式，手縄の結び方なども調べ，その結果を作図にまとめることにした。

(6) また，シロフミ田下駄の使い途・使い方を確認するため，シロフミ作業がどのようになされたか，シロフミ前後にはどのような労働がなされるかを，シロフミ田下駄が使われていた時点にまでさかのぼって確めた。ただし，小論では，シロフミ作業は苗代での作業ではなく，あくまでも本田の作業に限ってみた。同じ用具でも，仲間になる用具が異ると，その使い途もまた変わる場合がありうるので，各作業ごとにどのような用具が使われていたかに特に注意した。

(7) 施肥とシロフミ労働とのあいだには，ところによって，深いつながりがみられる。そこで，この調べでは，肥料の種類，投入量，肥料の運搬方法などについてもできるだけ確めることにした。

(8) シロフミの方法と田の形，田の土とのあいだにも対応関係が成立つことが予想されたので，土壌型（土性）についても，これまでの調査の結果を参照した。田の型として，ここでは仮りに次の区分にしたがった［横井，1970：pp. 188—194］。

湿田（湿湿田）……非灌漑中も水が下降せず田面が乾かない田。

乾湿田……非灌漑中も地下水が上り，田面が乾かない田，根雪におおわれている田を含める。

乾田……落水によって田面が乾く田。

田の深さは水を張ったときの状態によって，クロブシ田，スネまで田，腰まで田などと書き表した。

(9) シロフミ田下駄が使われなくなったのは何時頃からか。何故使わなくなったのか。シロフミ田下駄を使わないですむようになってから，どんな変化が生じたか。いったい，その地域でシロフミ田下駄を使う利点は何だったのか。そうした点についても確めてみた。

(10) 博物館標本の常として，ひとつひとつの標本に，必ずしも私たちの分析に適するような採集記録がともなうとは限らない。そこで今回の調べでも，博物館の所蔵標本をもとにして，採集地録をさがしだし，採集地や所用地をみつけ，実際にシロフミ田下駄を使ったことのあるその土地の方々から詳しく当時の状況を教えていただき，聞書(ききがき)をまとめ，この小論に利用させていただいた。お教えをいただいた事柄は，一般の報告や論文における引用とまったく同じものと考え，とりあえず，私の聞書から引用文をつくり，本文中カッコにおさめ，＊じるしをカッコの終りにつけ，文末の謝辞において拠りどころを明らかにさせていただいた。私の聞書は，もとより充分とはいいがたいので，もし聞き違い，書き間違いがあれば訂正させていただきたいと思う。また，さらにこの小論が何等かのきっかけとなって，この失われゆく労働用具，文化遺産に対して，地元の方々による詳しい記録がのこされればと考える。

Ⅱ. 形　と　用　法

1. 岩手県沢内村のオーアシ

岩手県西部の真昼山地に沿って流れ，やがて北上市で北上川といっしょになる和賀川の上流域，和賀郡沢内村では，シロフミ田下駄のことをオーアシと呼んでいる。

いま，旧民博標本によって沢内村のオーアシの様子をみると，型のうえでは枠型の大型に属し，寸法はタテ91cm・ヨコ32.5cm・重さ2.85kgで，いままで知られているシロフミ田下駄のうち，もっとも大きな型の1つに数えることができる。構造的には，全体として厚さ10mm・幅55ないし75mmの比較的薄い板からつくられ，ヨコ木は9

枚型式で，厚さ８ｍｍ・幅11cmの長い足板が枠にとりつけられていて，とくにヨコ木はタテ木にシゴクホゾ（ホゾの頭に小さなクサビを打込んだホゾ接ぎの型式）で接合されていることが注目される［文部省史料館，1970：p. 2］。この標本では手縄にあたるものが欠損しているが，本来はフジの蔓で，タテ木の両端からｘ字型に配られていたことが他の資料によって確められる。手縄は「野原に野生しているフジを６月初旬きってきて，自分でオーアシにとりつける」*，枠・足板とも「スギの木でつくり」*，「オーアシは昔は沢内村全体でつかわれていた，どこの家にも１つか２つは必ずあった」*といわれている。現在沢内村太田の碧祥寺博物館には３足のオーアシが収められているが，３足とも寸法には旧民博標本とほとんど変わらず，かつては和賀川の両岸約1.1㎞の地帯や山ぞいの水田で同じ型で同じ大きさのシロフミ田下駄が，おしなべて，つかわれていたことが推定される。

1953年，土地改良事業によって乾田化が行われる以前には，このあたりの田圃には，カタダとよばれる乾湿田と，ヒドロダとよばれる湿田があり，和賀川ぞいの田はほとんどすべてヒドロダだったといわれている。実はオーアシは，こうした湿田でつかわれたのだが，「田植前，オーアシでシロフミする時点でのデーロ（田の土）の深さは約70cmで，ちょうど人の股下ほどの深さで，その下は礫層と粘土層の互層」*で，オーアシがつかわれた時代には，「反収は５俵で，現在は同じ場所から最高12俵（最低でも６俵）とれる」*から，収量は現在の半分で，しかも，「昔は田の形も今のように整った四角形でなく，いろいろな形のものがあった」*。

それなら，このような状況で，オーアシはどのような使い途につかわれたのだろうか。その有様を田の労働全体の流れに即して追ってみよう。

① この地方では，３月頃，雪がまだ田圃に一面に積っているうちに，コエ（後出）を橇に積んで田へ運び，10ａごとに１つの盛りにしておく。「コエの材料はワラや草ですが（山の草・野菜の葉），とくに何の草ということではなく，柔らかな草であれば何でも刈りとり，コエにします。現在は牧草が主なようです。とくに目立つものをあげればカヤ・クゾなどです」*。コエは「10ａに1,012.5kgぐらい投入した」*。これは橇10台ぐらいの量だったという。

② やがて田の雪が消えると，盛りにしておいたコエを崩し，田面全体にひろげ，

③ そして，タブチ（田打ち）といって鍬で田越しする。田の表面には前年刈取ったあとの稲株が残されているので，このとき古株を掘りおこしてしまう。田打ちして耕起した田圃には直径20cmほどの塊ができるという。鍬は板鍬（鉄鍬）で，「男

と女でちがい，作る所によって重さは一定しなかったが，3.75kg以下でした」*。ここでは「カンデアイ（鍬台）は畑に使用し，田圃は全部鉄（カネ）の鍬でした」*。鍬の柄の長さは約1.5m，刃の長さは約21cmだという。田打は「１日１人で10ａ（百刈り）」*といった。

④　田起しした田へ金肥をいれ，水を張り，

⑤　塊をコキリという農具でさらに細かく２つないし３つに切り，

⑥　ウマにひかせるマンガで，土がドロドロになるまでタカキ（田掻き）し（１日25ａから30ａの割で），

⑦　田植にかかる。田植は６月５～６日から12～13日頃までで（遅いところでは25日頃までかかるところもあるという），田に金肥をいれ，「塊がかくれ，クロ（畦畔）から水が越えない程度に水をいれ」*，オーアシで踏み，「水があると苗を植えにくいので，植えやすくするために，ドロドロになった土が固らないくらいに水を落し」，苗を植える。「苗を植える直前（というのは余り早くやると田の土がまたもとの状態にもどってしまうので），植手のなかで手のあいた人たちが，これから苗を植えてゆく場所をオーアシでシロフミしてゆく」*。オーアシのヨコ幅は植える人の歩幅に一致している。「苗を植える直前に１人の植え幅分だけオーアシでならす」*。昔は植え手は後ずさりで４株ずつ植えていった。田のデロ（泥）はオーアシをかけるとドロドロに攪拌されてしまうという。「オーアシを履いて田にはいると，意外に沈まない，沈んでもせいぜい10cmぐらいだった」*。オーアシの進み方には，田の端から己字型に進む型と，田の中心にむかって回字型に進む型との２つの型があり，いずれも，オーアシの「前のほうに心持ち重心をかけ，オーアシの後を引きずるようにして前方に進んでゆく」*。「踏み込むと枠のあいだから土がもりあがってくるのがわかる」*。「昔は中学校ぐらいから，オーアシを踏んでこい，といわれた」*ものである。オーアシ労働がどのように激しかったかは，枠のタテ木に残こされた縄ずれの跡からも想像できよう。

⑧　やがで２回ほど手で除草し，実のりをまって，

⑨　９月20日頃稲刈する。「ヒザ小僧のあたりまで水をいれておくと，稲の穂がドロがつかない」*が，その田の水を落とし，鎌で稲を刈り，直径10cmぐらいのコタバ（小束）を10把ずつまとめ，刈取った田圃にたてて２日ぐらい乾かし，背中当（せなかあて）で背負ってハセまで背負ってゆく。力持ちの人なら10束，普通の人でも１度に８束ずつ背負うという。ハセは４段で，１段に稲束を２重にかける。こうして２週間ハセが

けし，10月20日前後に家に運び込み，10束を1束にまとめて家のニワ（土間）に積んでおき，11月3日頃に初雪，12月10日には根雪になるが，正月までに足踏脱穀機で脱穀し，冬越しした。

沢内村では，田植のときオーアシをつかうのは，あくまで，「前の年から古い稲株を田の下のほうに沈め，苗を植えやすくする」*点にあった。ここでは，肥料は昔はコエという厩肥（うまやごえ）とそれに金肥で，「オーアシは肥料には関係なく，田植作業をしやすくするための道具」*だったという。また，「オーアシは土性ともとりわけ関係なくつかった」*。東北の積雪地帯の多くの村々のように，ここでも，広い単作田をウマをつかって丁寧にシロカキし，川ぞいの粘土がかった粘り気のある塊は田打のあとコギリでさらに細かく切って砕土の助けにした。

土地改良事業によって耕地整理と乾田化がすすみ，ほぼそれに平行して自動耕耘機が導入され，シロフミも機械の力でできるようになり，オーアシは過去のものとなっていった。

2. 千葉県九十九里のオーアシ

千葉県では，利根川下流の地帯，それに九十九里沿岸一帯の水田で大型のシロフミ田下駄が，かつて，広く行われていたことが，これまでの詳しい調査から知られている［潮田，1967］。

表1はその調べのごく一部であるが，この表からも，この地方にはオーアシと呼ばれるタテ80ないし90cmの，ヨコ木6本型・9本型の枠型のシロフミ田下駄があり，6本型は利根川下流で稲刈のカンジキ田下駄と併用され，これに対して，九十九里では9本型で枠の下にタケの簀の子などを取りつけた一群の型のオーアシがつかわれていたことが推測される。

また，前記の岩手県沢内村のオーアシとの形のうえでの相違点としては，九十九里ではもっぱら幅20ないし25mmで厚さ30mmの断面矩形の角材が枠の材料につかわれていた点が一応注意にのぼる。

九十九里では，「オーアシをつかう田とつかわない田とがはっきりしていた」*，「オーアシはヌマといって，もと沼沢だったところを開拓したドロ深い田」*だけでつかい，ミタ（実田）と呼ばれる普通の乾田では昔からつかわなかった」*といわれている。

古い陸測の地図ではいっそうはっきりしているが，幅約10kmの九十九里浜平野には，汀（なぎさ）にほぼ平行に13列ないし9列の砂堆（かつての海岸外洲が土地の隆起によって

表1　千葉県のシロフミ田下駄

ところ ＼ 法寸・用途	タテ (cm)	ヨコ (cm)	使い途	備　　考
野田市目吹　(6)	89.0	31.0	シロカキ	草を踏みつけ土を柔かくする
佐倉市井野　(7)	84.6	36.0	シロフミ	大正はじめ頃までつかった
佐倉市坂戸　(6)	88.5	33.0	シロフミ	稲刈にはカンジキをつかう
四街道物井　(6)	93.0	35.0	シロの整地	稲刈にはカンジキをつかう
成田市野毛平　(6)	85.0	28.4	シロフミ	大正4～5年頃までつかった
光市小川台　(4)	85.7	35.7	シロフミ	昭和のはじめまで，タケ簀子
東金市高島　(9)	85.0	34.0	シロフミ	今でもつかっている
東金市福俵　(9)	79.0	32.0	シロフミ	昭和のはじめまでつかった
東金市松之郷　(6)	83.0	31.6	シロフミ	大正までつかった，カンジキ併用
横芝町鳥喰　(7)	70.6	32.6	シロフミ	昭和26～27年頃まで，タケ簀子
大網町白里　(9)	79.0	32.0	シロフミ	大正末頃までつかった
長生町水口　(9)	80.0	31.4	シロフミ	

［潮田，1967］カッコの数字はヨコ木の数字を示す

堤状にのこった微地形）がみられ，砂堆と砂堆とのあいだには昔のラグーンが湿地化した場所が，ところどころに沼をのこしながら広がっている［九十九里町，1975：pp. 20—24］。この砂堆と砂堆とのあいだの湿地が享保年間に開かれ，その後，延享の頃縄請けして寅新田とよばれていたものがヌマのおこりであるという［九十九里町，1975：p. 168］。

ヌマは泥深い湿田で，「落ちればはいあがれないほど，もがけばもがくほど深くはまりこんでしまう。なにしろドロ深い田で，オーアシを履かなければ胸の辺まで潜ってしまう」*，「ヌマの表面から約1mが水の層，その下1ないし1.5mがドロの層」*で，その下は国本層という砂層，土性は砂壌土で一松統や下総統に属し，10a当り昔は3俵しか収量がなかったけれど（乾田化された現在では8俵の良田にかわっている），「実田に比べて農業の方式がずっと粗放で，年中ヌマには水が張っているので雑草が生えず，田の草取の手間がなく，それに無肥で収穫できるし，ドジョウやコイもよくとれた（筌（ウケ）を100本も仕掛けておいて1度に3.75kgから5.62kgもとってきて仲買に売ったこともある），昔はヌマの年貢は見附田で縄のびがあり，隠田（かくしだ）的な魅力があった。また，ヌマは，大利根用水ができるまでは溜池の役目も果していた」*にちがいない。実際，実田（乾田）では「10月稲刈がすむと，11月20日までのあいだ，カベツタといって，4.5kgもある重い4本刃のマンノーで天地返しをし（田の土を掘りおこし），稲の古株を土のなかに埋め，年を越してから軽いマンノーで塊を小さく砕き，

低いウネをつくり，田植前，もう1度軽いマンノーでウネを左右に掘りおこし（これをチラシといっている），たいらにならし，その上をナラシボーでならし，水を張り，3・4日して田のドロが落着くのを待って田植をした」*。こうして，実田ではヌマの場合と比較にならないくらいキメの細かい田作りがなされていたわけである。

ヌマには「舟道といって幅2.7m（実際にはそれよりずっと広かった）の水路が設けられ，実田のように畦があるわけではないので，ところどころに杭を打ち，柳を植え，田の境の目じるしにした」*。「ヌマの面は年中水をかぶっているので青ぎっていて，縁にはマコモやアシが繁茂していた」*。

「昔は6月10日が麦刈はじめで，麦刈がすまないうちは田へはいらなかった。この時期は春蚕の繭かきの時期とも重なるので，麦刈，養蚕，田仕事とつづき，1年で1番忙しかった。養蚕は，大正時代，ここでも盛んに行われていた」*。

昔のヌマの田仕事は次のようにすすめられていった。

① 田の面に残っている前年からの稲の古株を，田植前，「いっせいにオーアシで踏んで田のドロのなかに埋め」てしまう。「オーアシは誰でもできるものではなく，相当に力がいる作業なので，1升飯を食うくらいの人でないと労働に耐えられず，力の強い人でも1日3ないし5a程度だった」*。

② 長いタケの柄のついたナラシボー（コスリ）で田の面を2・3度こすって攪拌し，

③ そこへ苗を植える。「ヌマ用には沼苗といって特別にセイの高い苗を育てておき，正条植で3.3㎡当り80株ずつ植えた」*。「苗を植えるときにもオーアシを履き，苗は底のたいらなフネ（田舟）に積んで運び，苗打ちをする」*。植えた苗はそのまま（湛水のまま）育ち，秋の稲刈まですごす。田植は6月25日から7月初旬にかけてすます。

④ 「稲刈は10月23日のエビス講の前までにすませた。稲は2ツカミで1把（直径10cm）に束ね，実田の稲とちがって首の（穂の）ほうを束ねておき，田にたてたY字型の叉木にかけて乾し，舟であつめ，実田とヌマのさかいにある1.2mの作場道にひろげ，この地方でいう亥ノ子組にして乾かし，8把を1束に束ね，4束ずつ1度に天秤で背負って家のニワ（前庭）まで運び，昔はカナゴキ（千歯・船場）で扱く」*。この頃は10月末の雨の多い季節で，「刈取った稲がなかなか乾かず，束の乾かなかったところが腐るほどである」*。「稲刈する人もオーアシを履き，稲を運ぶ舟を押す人もオーアシを履いた」*。

こうして，九十九里沿岸のヌマ地帯では，オーアシという名のシロフミ田下駄が田

の整理にも，そして，田植のときにも，稲刈にも，刈取った稲を運びだすときにもつかわれていたことが確められる。結局，オーアシはここでは底なし湿田の浮きの役目をし，ヌマの農業では，オーアシ・ナラシボー・田舟・鎌・田の縁をこしらえるときにつかう鍬の農具の取合(とりあわせ)が用具のすべてだったといってよい。

ヌマのオーアシ労働は戦後もつづき，ようやく九十九里町では，1961年，両総中部土地改良事業によって，ヌマに土が盛られ，新しく水路が設けられ，枡目状の乾田が開かれ［九十九里町，1975：pp. 302—313］，ほぼ時を同じくして自動耕耘機が導入され，収束することになった。

3. 埼玉県越生町のオーアシ

埼玉県入間郡越生(おごせ)町の小杉・大満(だいま)両地区では，「昔，どこの田でもオーアシがつかわれていた」*といわれている。越生町は北武蔵の平野と前方秩父の山々との両方にまたがる人口11000ほどの町であるが，２つの地区は山間にあり，県のまんなかを流れる入間川の支流越辺川(おつべがわ)が山手に３ないし４kmほど入った標高100m前後のところに位置している。

埼玉県立さきたま資料館所蔵のオーアシの１つについてみると，型としては中型の枠型で，枠のヨコ木は３本型式，タテ木は28mm角，枠のヨコは幅33mm角，足板と中のヨコ木には厚さ10mmの板がつかわれ，それぞれ通しホゾの型式で接合されていることがわかる。大きさはタテ53.5cm，ヨコ25.9cm，重さ1.8kgで，「杉材を用い枠は柾目(まさめ)，足板は板目。緒はワラ縄，手縄は棕櫚縄で長さ107cm」，手縄は舟型の足板の前側両側に結びつけられている［埼玉県立さきたま資料館，1972：p. 8］。同館にはこのほか２つのオーアシがあるが，型・寸法ともやや異なり，「オーアシはそれぞれ自分自分でこしらえてつかった」*ことが裏書きされている。

小杉・大満両地区では，ムラのまんなかを流れる「越辺川の水をひいて水田をこしらえた」*。越辺川の谷間は幅せいぜい500mにしかすぎず，東と南を370から560mの山にさえぎられているが，「これらの水田は昔から２毛作田で，ムギを裏作にし，10a当り60kg，４～５俵の収量で（現在は６～７俵），土性は壌土で，田の深さは足のクロブシ程度で，ごく浅かった」*という。「表土は浅いところで12cm，深いところで24cm，土は特に名称はありませんが，深い田はボックマ」*と呼んでいた。越生町の平野部では，昔は湿田があり，田のなかに丸太を埋めてその上を伝いながら田仕事をしたといわれているが，オーアシはそうした湿田では見当らず，山間の２つの地区だけ

でつかわれていたという。

稲刈が終ったあとの麦の裏作には，(a)4本刃のマンノー（刃の長さ27cm，柄の長さ約90cm，重さ3kg弱）で全面を天地返しする方法と，(b)稲の古株をそのままのこして株のあいだを浅くおこしてムギまきするドロボーまきの方法とがあるという。そこで，ここでは簡単な方法(b)について，ムギ作から稲作への過程を追ってみよう。

① 稲株のあいだを前記のマンノーで浅くおこし，

② 下肥(しもごえ)に灰をまぜて練(ね)りあわせ，それにムギの種を混ぜたものをつくり，

③ 株間の土の上に置いてあるく。これがムギまきで，昔は1斗播き8aだったという。

④ その後，マンノーで稲の古株をおこし，古株を抜きとり，

⑤ 春さき，杉の木の根っ子などを胴切りにし，それに鍬のような形に柄を取付けた道具（モックレコワシ）で砕土し，

⑥ さらに振りマンガをつかって細かく砕き，

⑦ 肥料としてワタダル（魚の内臓）やマメイタを施し，

⑧ 4月にムギの根元に土いれし，

⑨ ムギフミをし，

⑩ 6月ムギ刈りをする。この頃，田の苗代には苗が育っている。「この時期は養蚕とも重なるので忙しかった」*。

⑪ 刈取ったムギは畑で脱穀してしまい，

⑫ ムギを刈りおえた畑の面をひとまず削り，

⑬ ウマにひかせたマンガで荒(あら)クレをし，

⑭ 土がかくれるくらいの深さに水をいれ，

⑮ トンボといって細長い板にT字型に柄を取付けたものでかきまわし，

⑯ 苗が植えられる状態にしておいて，そこへ刈取ったムギの稈をもってきて撒(ま)き，

⑰ 浮きあがるムギカラをオーアシで踏みこんで田の泥のなかに沈め，

⑱ 田植をする。「田植は6月中旬からで，半夏生(はんげしょう)にかかると収穫が半分になるといって遅くなった人は忙しく田植をすませた」*。

⑲ 田の草は3番までとり，

⑳ 稲刈をむかえた。

手縄は前記のように，ちょうど足板の前両側に結び，「縄を両手でもち，オーアシの前側をすこし持ちあげるようにして前進みで踏んだ」*。進み方は己の字型のようで

あった。

「オーアシは戦後までつかっていた」*。オーアシがつかわれなくなったのは，ここでは，裏作の移りゆきと関係しているといわれている。「裏作はオオムギ，コムギ，ハダカムギでしたが，コムギの稈は屋根を葺くのにつかい，オオムギ，ハダカムギの稈を田にいれたのですが，戦争中農家の屋根がだいぶんいたんでおり，そのためコムギを作る家が多くなったことです。食糧事情もスイトン等を作り，麦飯が少なくなったことです」*。こうして，屋根の葺草としてのムギ稈や，スイトンなどを作る都合で昔のようにオオムギやハダカムギを作らなくなり，田にいれるムギカラがなくなり，したがってオーアシも使わなくなったという。

それはそれとして，前方秩父の山間の２つの地区で，昔から，クロブシまでの比較的浅い田で，肥料としてのオオムギの稈を田の泥に沈めるため，枠型で中型のオーアシが戦後までつかわれていたことが確められる。これをしも，後出の緑肥踏込み型のオーアシ農業の越生的形態とみてよいかどうかには問題がのこるが，肥料としてのムギカラは，ここでは同じ田圃の裏作のムギカラで，裏作の作物を巧みに利用していたこと，そうして山間のせまい耕地の地力を維持しようとしていたらしいことが伺えよう。

これは単なる印象にしかすぎないが，そこには，関東山系のムギ作りと北武蔵の乾湿田・湿田地帯の稲作と緑肥踏込み農業との出会(であい)をみることができようか。

4. 八王子市柿ノ木平のオーアシ

関東山系では，越生町の小杉・大満以外，これまでの調べによって，都下八王子市南浅川地区の柿ノ木平そのほかで，かつて，中型の枠型のシロフミ田下駄が広く使われていたことが明らかにされている。

八王子市郷土資料館所蔵の同地区のオーアシによれば，タテは62cm，ヨコ29.4cmで，枠はタテ木・ヨコ木とも幅25mm，厚さ32mmの角材でつくられ，その枠のなかに幅16mmのタケのヨコ木３本が枠のタテ木に含みホゾで取付けられていて，それに幅12.2cm，厚さ16mmの足板，そして，緒は左縄で，横緒・鼻緒とも１本のワラ縄でつくられていること，手縄は太さ20mmで長さ87cmであることなども調べられている。

おもしろいことには，柿ノ木平でもまた，オーアシの田は「ごく浅い乾田で，土性は砂壌土，田の底は鍬がはいらないほどかたく，ウシやウマをつかうので田１枚の広さは1.5aか２a」で，10a当りの収量は５～６俵で，「ほとんどがムギを裏作にした

2毛作田だった」*という。

柿ノ木平では，6月はじめ裏作のムギの刈取がおわると，すぐそこへ夏作のお米をつくった（ここでは裏作の過程は前項でもみているので省略しよう）。

① いままでムギをつけていた畑全体を，柄の長さ1.5m，刃の長さ15cm，重さ1.9kg程度の4本刃のマンノーでおこす（1日1人前5aという）。こうして直径20cmぐらいの塊ができる。

② 塊がかくれるくらいに水をいれ，

③ ウマにマンガをひかせ，アラガキをし，まず田の上のクロから出発してタテに6クワ（後出），それに交るようにヨコに（田の左側からはじめて），次に田の下のほうのクロから出発してタテに，そして田の右側から出発してヨコにマンガをかけ，田の四周のクロのどこからでも欠けなく出発させるようにして，ていねいに，まんべんなくマンガをかける。ウマのいない家では，ウマのいる家から賃仕事できてもらった。はじめの6クワは，最初の2クワで犁の両刃をつかって田の面をたいらにし，塊をくずし，次の2クワで，田の底まで深く片刃でおこし，最後に両刃をつかってたいらにならすという。マンガは1日1役15aという。

④ アラガキがおわると厩肥を10a当り4カツギ（?）施し，

⑤ そのままで1日おき，そのあいだに田のクロの手入れをし（クロツケ），

⑥ 水を張ってある田をマンノーで（4本刃のマンガで）ザブザブおこし，

⑦ アラジロと同じように6クワ，ホンジロをウマをつかってかく。こうして，田の土はドロドロになる。

⑧ そこへ，山林や堤から刈ってきたカツチキ（後出）を，例えば田の上のクロに平行に敷きつめ，

⑨ カツチキと直交するように（今度は田の左右のクロに平行に）オーアシで踏み，カツチキを田の泥に埋めてゆく。「丁寧にする人は田をのめっこくするためにオーアシで3回も踏んだ」*という。踏込むとカツチキの上に土があがってくる。

⑩ 田植をし，

⑪ 田の草は2回手でかき，

⑫ 水をおとして土用干しをし，水をやや深く張り，ヒエ抜きなどし，昔は「ヒトシモ（一霜）かける」といって，霜がおりてから稲刈をした。刈取った稲は田に広げて3日ぐらい乾し，直径30cmぐらいの束にまとめ，背負梯子につけて家まで運び，家のニワ（前庭）で稲こきをした。

ムギを裏作しない人は，「その田を翌年マンノーでおこし，ムギを作る人は長さ2mぐらいの鎌で田を切り，そのあとをマンガでおこし，振りマンガで砕土し，堆肥をいれ，土を稲株にかぶせるようにしてサクをこしらえた」*。

カツチキは緑肥のことで，「ゴンゾウシバや，田畑の畔の雑草や，サンセイシバといって山から刈取ったナラやハギの若い枝，それに木の若芽などをいれた。シバは長さ1mほどに伐り，ショイコ（背負梯子）に1度に3把（これをヒトショイという）づつつけ，1a当り4ショイいれた。シバを刈るのは共有山で，夏至までは山の口が開かなかった。夏至の当日は，夜の明けるのを待って村の人たちはいっせいに山へゆき，前もって見つけておいたよい場所を取合(とりあ)いで刈ってきた。1ショイは56.2kg，1a当り225kg施した。堆肥は1aに2ショイ（ただしカツギカゴ2カゴ，1カゴは2ザル）150kgいれた」*。「昭和のはじめ頃にはコギリコミといって，カツチキを押切(おしぎり)で10cmぐらいの長さに細かく刻み，それを田にいれる方法も行われた」*。

柿ノ木平でも「オーアシは使い方がなかなか難しく，足はおくるだけの気持で，足で進もうとすると，泥がかえって粘って，なかなか，前へ進めなかった。そして，たちまち足の指のあいだに鼻緒ずれの豆ができてしまった」*。手縄だけを頼りに，やっとオーアシを持ちあげるようにして踏んだという。進み方は己の字型で，丁寧な人は1度己の字型に踏んだ上をさらに回型に踏んだものだといわれている。

このようにして，浅川上流の柿ノ木平でも，枠型で中型のシロフミ田下駄が緑肥の踏込み農法やムギを裏作とする2毛作に結びついて使われていたことが確認できる。

ここでは，明治末期にはウマを使わない家がふえはじめ，ウマがすたれた戦前には，1時期ウシをつかって荒ジロをしたこともあったという。そして，1950年代にはウマはまったくみられなくなり，1955年頃には自動耕耘機がつかわれはじめ，ウマやウシでシロをかくより耕耘機でシロカキするほうが土がよく錬(ね)れるようになり，それとほぼ同時期に化学肥料の大量使用の時代がきて，カツチキそのものを使わなくなり，オーアシは自然姿をけしていったのだという。

5. 岐阜県国府町のオーアシ

岐阜県北部の宮川の上流，国府町の辺りでは，乾湿田をサラタといい，湿田をヌマダと呼んでいた。乾湿田はクルブシの上くらいの深さがあり，田の6割以上を占め，湿田はコシまでつかる深い田で，10a当りの収量は乾田で8俵，湿田で5ないし6俵といわれた。

この辺りでは11月下旬初雪，12月中旬には根雪が積るが，国府町では宮川の南側や宮川支流の荒城川の南に約500mの幅で帯状に水田地帯がひらけ，また，山あいにはいった瓜巣川の両側にも山田が作られていた。これらの田は標高500m前後のところにあり，まわりを700m台の小高い山に囲まれていた。土性は壌土または砂壌土で，「オーアシは田圃の土性に関係なく，乾田・湿田をとわず，どこの田でもつかわれた」*。「オーアシは，乾田では，タタカレ（後出）を田のなかに沈め，同時に田の表面をたいらにし，田植をしやすくするために踏み，湿田では田の深さが腰まであってウシやウマがはいれないから，オーアシで踏んでたいらにした」*。オーアシは，ここでは，男の人も女の人も履いたし，「どこの家でも2つは用意してあった。寸法や形はどれもほとんど同じで，つい最近まで農耕具をつくる店で売っていたものだ。材料はマツやヒメコだった」*という。

高山盆地・宮川上流のシロフミ田下駄については，旧民博標本では，国府町名張のものと高山町で集められたものとの2例に接することができる。名張のものはタテ74cm，ヨコ29cm，重さ1.8kg，高山で集めたものは新品で，タテ71cm，ヨコ29cm，重さ2.5kgで，使いふるしたものかどうかを別にすれば，寸法・作りともほとんどかわらない。形態的には枠型で，ヨコ木は3本型式で，枠の骨組は30mm角の木でつくられ，それに厚さ15mmの舟型の足板が通しホゾで接合され，また，中のヨコ木は足板の下に取付けられている。そして，これまでみてきたシロフミ田下駄はおおむね梯子のようにヨコ木がタテ木にホゾ接ぎされていたのだが，このシロフミ田下駄では，1番はじめのヨコ木にタテ木がホゾ接ぎされていて，ちょうどお宮の鳥居に近い型に組まれている点が，きわだった特徴といえよう。この型では，また，タテ木や足板の後が長く尾をひいていて，全長の3割にもおよんでいることなど珍しくない［文部省史料館，1970：p. 6］。乾湿田では，

① 雪がとけて4月から5月になると，3本刃のクマデと呼ばれる鍬で田の土を起し，直径20cmほどの塊をつくる。

② 3ないし4日そのままにして，クマデ（鍬）で塊を小さく砕土し（これをダンゴコワシといっている），

③ もう1度クマデ（鍬）でおこし，

④ 水を張り，

⑤ 5月下旬頃タタカレと堆肥をいれ，

⑥ 先に鍬のついている木の鍬（？）で田の泥をかきまぜて，表面をたいらにし，

⑦　オーアシで踏み，

⑧　田植をした。

⑨　稲刈は９月末から10月にかけてで，晴天１週間ハサボセしたのち，千歯・稲コキなどで脱穀した。「お百姓がすむと，冬は炭焼や日雇に出た」*。

湿田のほうでは作業手順は乾湿田よりもはるかに簡単だった。

①　古い稲株をコシまで田圃につかりながら，クマデ（鍬）で打ちおこし，

②　堆肥などいれても田のなかで分解しないので，大豆や油粕などの肥料を施し，

③　田植直前に「オーアシに乗って」田をおさえ，

④　苗を植える。田植のときには下駄型のタゲタを履くこともあった。

オーアシは前進みで，田のまんなかにむかって回字型に踏みすすんでいった。「手で縄を持ちあげながら，オーアシの尾を沈めないよう注意して，２回くりかえし踏むと，きれいになる」*という。

肥料のタタカレは５月下旬山で刈ってくる緑肥のことで，ナラ，ツツジ，カヤの若芽や造林の下草を長さ１ｍほどに伐り，ウマにつけて運び，それを押切（おしぎり）で10㎝ぐらいの長さに切り，田の面にまんべんなく敷く，そして，分解を早めるために石炭を撒くという。タタカレは１種の基肥（もとごえ）で「毎年毎年いれているうちに土が肥えてくる。タタカレをいれていたときには，土は現在よりもっと柔かかった」*ともいわれている。

この地域では，大正時代にウマにひかせるヒツカという犁が導入されたが（それ以前にもところによって人がひく ヒツカ という全長５ｍぐらいの スキ がつかわれていた），ウマをつかうヒツカの場合には，

①　４月末から５月にかけてヒツカで田を起こし，

②　クマデ（鍬）でダンゴコワシ（砕土）し，

③　田の底のほうの土が固くなるのでコギリをし，

④　水を張り，

⑤　マンガで荒カキをし，

⑥　肥料をやり，

⑦　ヒツカでシロスキ（シロカキ？）をし，

⑧　それからマンガでシロカキを行い，

⑨　田植をした。

ウマにひかせるヒツカを使う場合には，「とくにオーアシはいらないが，ゴミが浮いてくるようなときにはオーアシで踏んで稲の古株などのゴミを田のなかに埋め込ん

だ」*。「ウマをつかう時代でも，橋や道路の関係でウマの行けない田圃がかなりあったので，そこでは昔どおり，オーアシをつかって田仕事をしなければならなかった」*という。

高山盆地，宮川上流の地帯では，このように，鳥居型のオーアシが乾湿田にも湿田にも昔からつかわれ，同じオーアシを乾湿田では緑肥を田にいれるためにつかい，湿田では田の面をおさえ，田植をしやすくするためにつかっていたことが確められる。これはシロフミ田下駄の用法を考える上でとりわけ示唆的である。

国府町でも，1954年，土地改良事業によっておおかたの湿田が乾田化され，1955年，自動耕耘機がつかわれだすと，オーアシはほとんど使われなくなってしまったといっている。

6. 長野県穂高町のハコゲタ

長野県の松本平・安曇地方では，ハコゲタまたはオーアシといって，箱型のシロフミ田下駄がつかわれている。1例によれば，このゲタはタテ38.5cm，ヨコ23cm，重さ1.75kgで形は小さく，タテ木・ヨコ木とも厚さ10mm，幅11cmの薄い板をちょうど囲の字型に組合せてこしらえられており，それに同じ厚さで幅11cmの足板が釘で取付けられているという［文部省史料館，1970：p. 6］。

やや離れた上伊那北部の箕輪では，オーアシをシロフミ下駄ともいい，どこの農家でも必ず2足以上は用意してあった。オーアシがつかえて，はじめて一人前の百姓といわれ，オーアシで代踏（しろふみ）することを「オーアシにのる」といい，代踏のときウマで踏むのをアラシロ，人が踏むのをコフミ，オーアシで踏むのをホンジロといい，シロフミすると田の土がねばってよいといわれていた，「オーアシは泥田へ踏みこまぬためというより，緑肥をいれて代踏をした後に田の土を平にしたり，ネバラせるのが目的で使われている」，浅い田でつかわれたオーアシは板が薄くセイが高く，沼田（湿田）につかうオーアシは板が厚くセイが低かったなどの点がすでに報告されている［AM，1937：pp. 302—304］。

長野県南安曇郡穂高町では穂高川と高瀬川にはさまれた狐島（きつねじま）地区で昔ハコゲタがつかわれていたが，ハコゲタをつかう田は「3aから5aの小さい田で，ごく浅く，足のクロブシまでの深さしかなかった。収量は10a当り6～7俵で（現在では10俵から12俵にもなっている），当時としてはそれほど他とかわらなかった」*といっている。

狐島地区では，「マンノーで田をおこしたあと，カリシキを敷き，それをハコゲタ

で田のなかに踏込んだ。コンペト（後出）を使う前には，裸ウマにカリシキを踏み込ませたこともあったらしい」*という。また，昔，「カリシキに川岸に茂っているハンノキやヤナギの枝を鉈でおろしてきて，田まで背負ってきていれた」*といい，山手の同じ町の有明地区では「自分の持山からクヌギやナラなどの広葉樹の枝をおろしてきていれたり，レンゲをいっしょにすきこんだ，山から緑肥を運ぶのは子供たちの仕事で，夜中に起き，セイの低い木曽ウマを曳いて何度も山へいって運んできた」*という。緑肥にした枝が完全にくさらず，翌年田起しをするとき抜きとったりしたという話もきかれる。

オーアシは，田へ刈敷をいれる人がすくなくなったのと，ドレツ（重い木に板を取付けてウマにひかせる農具）の改良で，1934年頃にはほとんどつかわれなくなったといわれるが［AM，1937：p. 203］，狐島でも「ハコゲタをつかわなくなったのは，手間がとれること，カリシキをいれなくなったからで，カリシキのかわりにレンゲをいれるようになり，金肥を多く利用するようになったからだ」*といわれている。

ハコゲタの用法については詳しい資料を集めることはできなかったが，念のため，有明地区（山ぞいの非田下駄地帯）のかつての緑肥農業について，その様子を書とめておきたい。それによってこの地域の有畜農業の発達ぶりをうかがうことができよう。

① 冬，田には30cm程度雪が積ることがある。4月の雪どけとともに，3本刃のマンノー（鍬）で田おこしをする。

② そして水をかけ，塊をこわし，

③ 骨粉，豆粕，石炭，堆肥などをいれ，

④ ウマにコンペトを曳かせ，アラクし，アラフミをする。同じ田を2～3回まわるので1日20～30aである。コンペトは幅1m，差渡し20cmほどの円筒状の木に鉄の刃を植えこんだもので，回転させて田の面の泥をコネる。

⑤ そのあとエブリでたいらにならし，

⑥ 1ないし2日そのままにしておいて，田の面一面にカリシキをひろげ，

⑦ コンペトでナカフミをする。ナカフミの過程でカリシキが田の泥のなかにすきこまれる。

⑧ ナカフミ後，1ないし2日してシログルマかコンペトでシロをつくる。ナカフミの後，モッタテといって，マンノーで水を張ってある田の面をもう1度おこす人もいる。

⑨ 苗を植え，

⑩ 有明様のお祭がおわる10月中頃から11月中頃までのあいだに稲刈をおえ，3日ぐらい地干(じぼし)し，2.4mのまるいニオを積み，それから束ねて家まで運び，家のヒサシや庭先へ積んで脱穀した。

Ⅲ. むすび

以上，この小論では，シロフミ田下駄の4つの型をあげ，とくに私がひきつけられた6つの例をもとにして，シロフミ田下駄の形と使い途・使い方との対応関係をつきつめてみた。その結果は表2のようにまとめられるが，なお，思いついた二，三の点をのべてみようと思う。

1. シロカキ田下駄の使い途としては，すでに指摘されていたことだが，田に苗を植えやすくするために前年の古い稲株を田の泥のなかに沈め，田の面(おもて)をたいらにするといった使い途が，まずあげられる。これを仮りにここでは使い途（A）としよう。つぎに，木の若芽や山林の下草や堤の草などを1種の緑肥として田にいれる際，これらの刈敷(かりしき)を田の泥のなかに沈めるといった使い途があげられる。これを使い途（B）とする。しかし，そのほかに，千葉県九十九里町のオーアシのように泥深い湿田での働きやすさを助けるという使い途もあげられる。これを使い途（C）としよう。

2. そこで，シロフミ田下駄の型と使い途の型との対応を求めれば，そこには特定の関係が設定できそうに思われる。まず，枠型の大型と呼ばれているものには2つの関係が区別される。1つは岩手県沢内村のオーアシのように使い途（A）と結びついたもの，もう1つは千葉県九十九里町のオーアシのように使い途（A）のほかに（C）とも結びつくものである。この2つの型が，それぞれ，どれほどの広がりをもっているかは今後の興味ある課題であろう。

3. 枠型の中型のシロフミ田下駄に属する埼玉県越生町のオーアシ，都下八王子市柿ノ木平のオーアシ，そして，岐阜県国府町のオーアシは，いずれも使い途（A）とともに（B）とも結びついている。中型のシロフミ田下駄には，もちろん，このほかにもまだ多くのバリエーションが考えられよう。また，使い途（A）とだけ結びつく中型の枠型シロフミもありえよう。箱型のシロフミ田下駄は松本平・安曇野を中心に広がっているが，一応使い途（A）＋（B）の形が想定できる。枠型の小型も，もしこの範疇が成りたつとすれば似た結びつきが予想できよう。

4. シロフミ田下駄の型とシロフミ労働を含む田仕事全体の型との対応は，各項ごとにとりわけ注意してきたが，岩手の沢内村のオーアシに代表される積雪地帯の大型

表2　シロフミ田下駄の諸系列

事例＼内訳	農業の型	田仕事 田打ち	砕土	施肥	代かき	肥料の内訳	土	その他
1. 岩手和賀・沢内のオーアシ（枠大型）	雪積単作 沢内川両岸地域の農業 馬	クワでおこす	コギリでクワを入れて	田打ち前に施肥を	テマンガでシロカキ 田植前に大足で	マヤゴエ	マタシタ田（湿田） ヒドロダ壌土 10a当り5俵 粘土がかる	大足で浮んでくるイネの古株を沈め，土を攪拌する
2. 千葉山武・九十九里のオーアシ（枠大型）	九十九里平野の沼田の無肥農業 湛水田	（ナシ）	（ナシ）	（ナシ）	前年の古株ドロに大足で埋め，ナラシボーでこする	（ナシ）	ヌマという底なし田 砂壌土 10a当り3俵	大足は整地，田植，稲刈，運搬に 草取りはしない 昭和36年土地改良でなくなった
3. 埼玉入間・越生のオーアシ（枠中型）	越辺川ぞいの山田の二毛作（ムギ・コメ） 馬	四本刃のマンノーで，ムギ株の間をクワで	水をいれて畑作で手のこんだ砕土	荒クレ後ムギカラを	馬マンガで荒クレトンボでかきまわす 大足で	ムギカラ	クロブシ田 浅い田（乾田） 壌土 10a当り5俵	小麦は屋根葺材，大麦・裸麦を緑肥に 戦後なくなったコムギを作る家が多くなった
4. 東京八王子・柿ノ木平のオーアシ（枠中型）	浅川山間の谷田の二毛作（ムギ・コメ） 馬	四本刃のマンガで	水をいれて畑作でティネイに砕土	荒がき後マヤゴエを ホンジロ後カツチキ	馬マンガでアラガキ，ホンジロ，そのあとオーアシ	田畑の畔の草，ナラやハギの若枝，木の芽を緑肥	浅い田（乾田） 砂壌土 10a当り6俵	戦後なくなる30年代耕転機がはいって
5. 岐阜吉城・国府のオーアシ（枠中型 後ヒキ型）	宮川ぞいの盆地の稲作雪積 単作農業 馬	クマデという3本刃の鍬で	水をいれてクマデで	タタカレという緑肥を荒ジロのまえに	木の鍬，のちにヒツカで，そののちオーアシで	ナラ・ツツジ・カヤなどの若芽，林の下草	乾湿田・湿田（コシまで田） 壌土，砂壌土 10a当り5～8俵	乾湿田ではタタカレの踏込み 湿田では田をおさえるのに
6. 長野南安曇・穂高のハコゲタ（箱型）	高瀬川ぞいの田 単作農業 馬	3本刃のマンガで	水をいれて	荒代前にカリシキを	馬にふませる荒代，ハコゲタをその後に	ハンノ木やヤナギの若枝	クロブシ田 浅い田（乾湿田） 壌土 10a当り6俵	有明では養蚕などではやくから金肥・馬耕に切りかえた？。コンペトとシログルマ利用アラフミ・ナカフミ・シロの間に緑肥カリシキから金肥・馬耕に昭和ハジメにはナクナル

のシロフミ田下駄には湿田での単作稲作が結びつく。その場合，肥料は厩肥と金肥で，その後にはウマ・枠場・厩肥・有畜農業をつらねた伝統的な暮しの立てかたをとりだすことが容易である。同じように，ここではあげることはできなかったが積雪地域の乾湿田で，しかも浅い田での農業には岐阜県国府町のオーアシ以外にも中型のシロフミ田下駄がつかわれたのではなかろうか。大型の九十九里型のシロフミ田下駄には，ヌマという底深い湿田の無肥農業が結びついていた。

5.　シロフミ田下駄の中型には前記のように刈敷踏込み農業が結びつく。なかでも埼玉県越生町や八王子市柿ノ木平では，ムギを裏作とする2毛作が昔から山間の田圃で行われていたことが興味をひく。この型の農業とそれに伴う田下駄の型の広がりも今後の問題となろう。

6.　シロフミ田下駄に結びつく用具としては，以上の6例によれば，熊手鍬型の4本刃ないし3本刃の鍬，エブリ，犁，マンガ，それに畦塗りの鍬，苗運びの田舟，鎌，背負梯子や背中当てなどの運搬品をあげることができる。こうした用具の結びつきは，当然といえば当然であるが，ひとまず注意しておいてよい。

7.　シロフミ田下駄は，戦後の土地改良によって湿田や湿乾田が乾田化され，やがて自動耕耘機が普及するとともに生産の場から遠ざかったことが，以上の調べからも明らかである。シロフミ田下駄それ自体いまでは珍らしい用具，文化遺産になってしまったが，シロフミ田下駄の形と使い途・使い方との係りあいを調べ，シロフミ労働を含む過去の農業の姿にまで分析を深めてみることは，現在の地域農業ないしは地域文化の移りゆきを理解するだけではなく，地域文化の土台を掘りおこし，再検討の目をむけることにつながっているのではなかろうか。

余論　出土遺物との対応

我国でシロフミ田下駄がいつ頃からつかわれはじめたかについては，いちおう，稲作が本格的にはじまった弥生時代を考えることができる。事実，静岡県山木遺址ではシロフミ田下駄の足板と思われるものがおびただしく見出されているし［後藤，1962: pp. 67—74］，時代は下るが，山形市の嶋遺址などからは，ほぼ完全に復原できる大型のシロフミ田下駄が出土している［山形市，1960：p. 110］，［浜松市遺跡調査会，1971：p. 32］。もし，これらの遺物が現在のシロフミ田下駄にまで，仮りに，つながるとすれば，それらの使い途は何だったのだろうか。もちろん，私はこれまで遺物を取上げたこともないし，遺跡や遺物は発掘の経験をもった人たちが一番よく知ってい

るのだから，以下は印象にしかすぎないが，この点を考えてみよう。まず山木の足板であるが，仮りに千葉県で使われていた田下駄の値と比べあわせることができるとすると，私の怪しげな統計的勘定によれば（表3），山木の足板の値の広がりは現在ま

表3　伊豆山木との対比

測定ヶ所＼値	標本数	標本平均	平　均	標本偏光	標準偏差	出　所
千葉県の稲刈田下駄のタテ	90	39.1	± 0.9	4.3	4.3	[潮田：1967]
千葉県のシロフミ田下駄のタテ	18	81.7	± 3.9	7.7	8.1	[　同　上　]
伊豆山木遺跡出土足板のタテ	24	51.7	± 2.1	4.8	5.0	[後藤：1962]
千葉県の稲刈田下駄のヨコ	90	24.6	± 0.6	2.8	2.8	[潮田：1967]
千葉県のシロフミ田下駄のヨコ	18	32.7	± 1.5	2.9	3.0	[　同　上　]

でのところ稲刈田下駄の値にむしろ寄っていて，シロフミ田下駄の可能性とシロフミ・稲刈両方の可能性，稲刈田下駄の可能性の3つのどっちとも決めかねるような感じをうける。ただし私は人情として第2の可能性がおもしろいと思っている。鳴遺址第8地点出土の遺物はタテ80cm，ヨコ45.6cmで，ココ木は12本，タテ木は厚さ20mm，幅40mm，ヨコ木は幅40mmで通しホゾの型式で接合されている。足板はごく小さくタテ33cm，ヨコ12cmで，ヨコ木に乗っかるような形で取り付けられている。また，静岡県浜松市伊場遺址の遺物はタテ78.5cm，ヨコ44.5cm，ヨコ木は9本型式で，厚さ33mm，幅30ないし35mmの角材でつくられているという［前掲］。これら2つの田下駄は寸法と形からみて，ほぼシロフミ田下駄の枠型，しかも大型と対応させることができ，また，使い途的には，使い途（A）の型，むしろ，使い途（A)＊（C）の型をあてることができそうに思える。想像をめぐらせば，シロフミ田下駄は大昔このように幅が広くタテが長く，それが次第にせまく使いやすく改められていったのではなかろうか。田下駄の形は田の成りたちと深い係りをもっている。田下駄様の出土遺物の正体をあかすには，手段（てだて）をつくして田の成りたちを調べ，なお，田下駄とつながりのある仲間の用具の組み合わせを考え，そして，当時の田仕事全体の流れを思いうかべ，それを現代の稲作と比べあわせてみる，ないしは，現代の稲作りにまでつなげてみるといった分析の方法が当然必要なのではないかと考えられる。

謝　辞

小論への調査に御協力給った岩手県沢内村役場社会教育課，碧祥寺博物館，千葉県

九十九里町誌編纂委員会，埼玉県越生町教育委員会，埼玉県立さきたま資料館，八王子市郷土資料館，岐阜県史料館，岐阜県国府町教育委員会，長野県穂高町教育委員会，同町郷土資料館，国文学研究資料館・史料館の諸先生，とくに貴重な御教えを拝いだ高橋一雄，古川力，宮崎茂一郎，関口剛介，岩田邦治，栗原茂，船田政一，駒屋栄作，伊藤良作，望月定，草間芸登，矢花文雄諸先生に心からお礼を申し上げたいと思う。高橋・岩田両先生には私の聞き書きをみていただき，さらにお手紙によってお教えをいただいた。また，潮田鉄雄，佐藤広両先生にも御協力を拝いだ。余論については，とくに文化庁の木下忠，浜松遺跡調査会の向坂鋼二両先生から資料をいただいた。

文　　献

AM（アチック・ミューゼアム），1937，『民具問答集』第1輯，AM（アチック・ミューゼアム）。

浜松市遺跡調査会，1971，『伊場遺跡第3次発掘調査概報』伊場遺跡発掘調査会。

潮田鉄雄，1967，『田下駄図集　千葉県篇』物質文化研究会。

九十九里町誌編集委員会，1975，『九十九里町誌』総説篇，千葉県九十九里町。

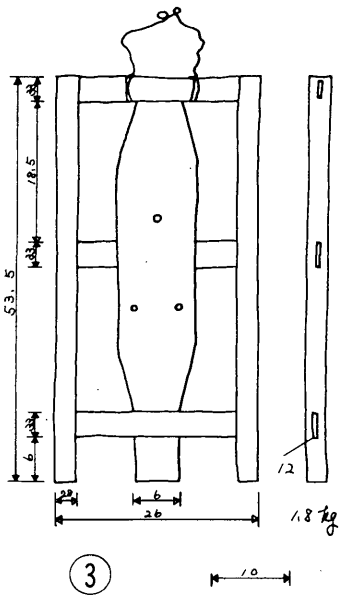
文部省史料館，1970，『文部省史料館所蔵民族資料図版目録』第3巻，文部省史料館。

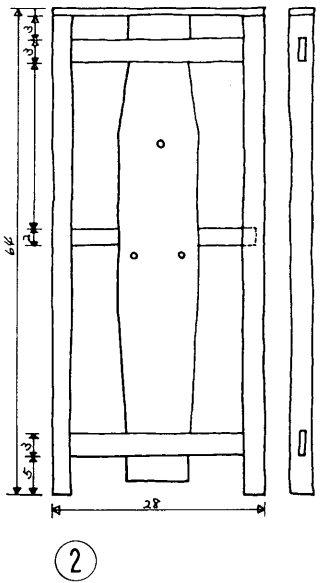
埼玉県立さきたま資料館，1972，『さきたま資料館報』No.3，埼玉県立さきたま資料館。

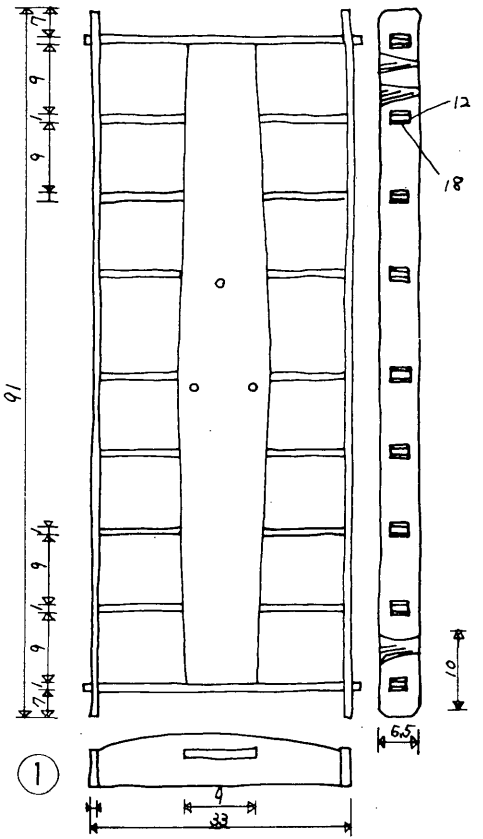
山形市史編纂委員会，1960，『山形市史別巻　嶋遺跡』山形市。

後藤守一編，1962，『伊豆山木遺跡』築地書館。

横井利直，1965，『土壌』東京農業大学社会通信教育部刊。

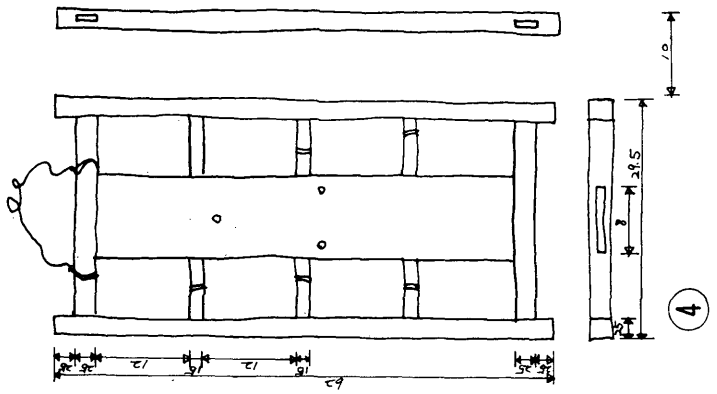




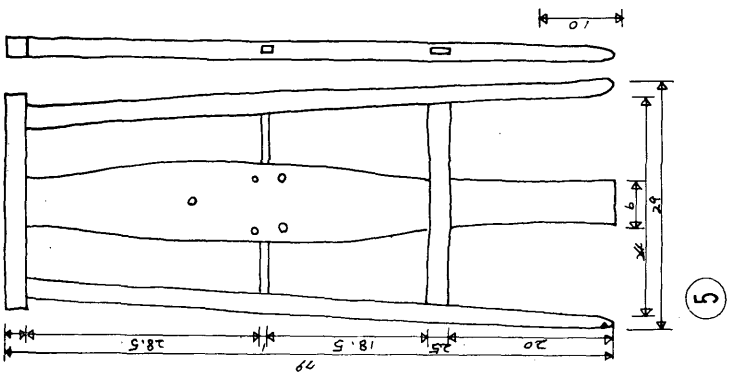


① 岩手県沢内村のオーアシ　④ 八王子市柿ノ木平のオーアシ
② 埼玉県越生町のオーアシ　⑤ 岐阜県国府町のオーアシ
③ 埼玉県越生町のオーアシ　⑥ 長野県穂高町のハコゲタ

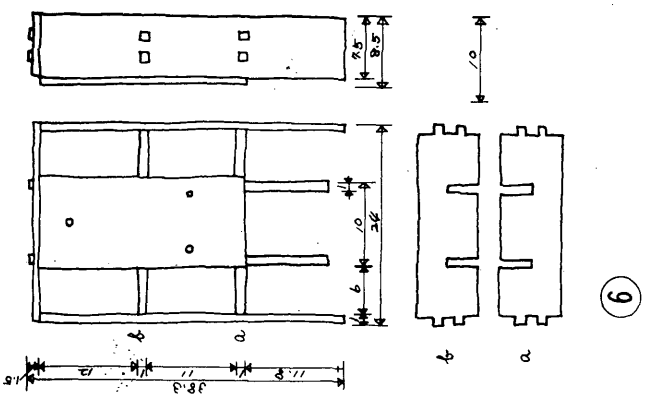
シロフミ田下駄の諸形態



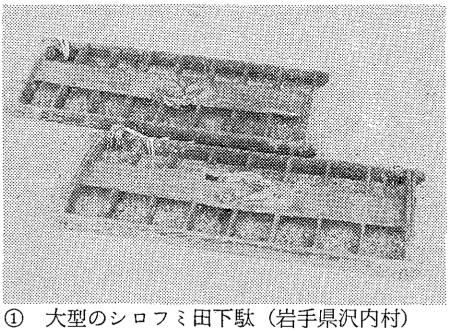
④



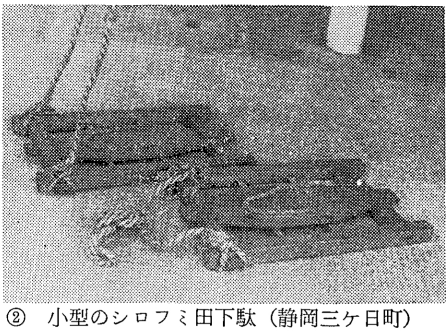
⑤



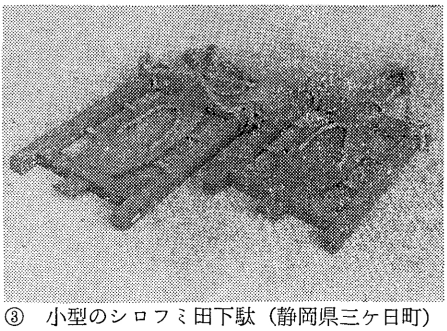
⑥



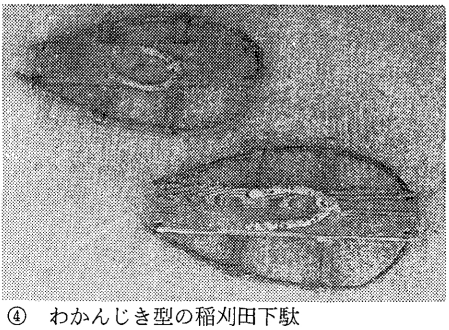
① 大型のシロフミ田下駄（岩手県沢内村）



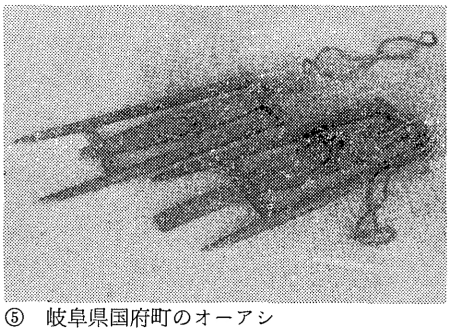
② 小型のシロフミ田下駄（静岡三ケ日町）



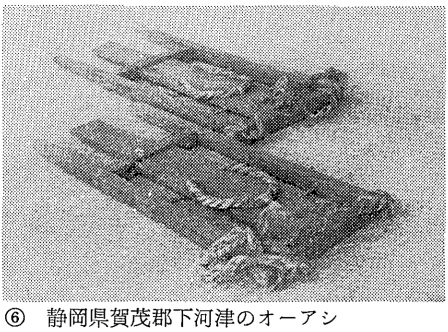
③ 小型のシロフミ田下駄（静岡県三ケ日町）



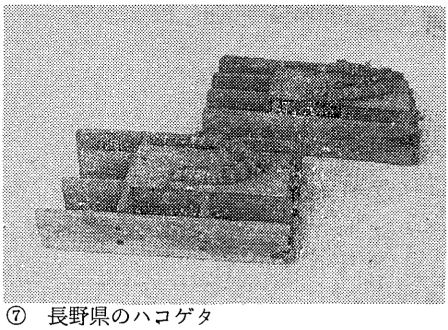
④ わかんじき型の稲刈田下駄



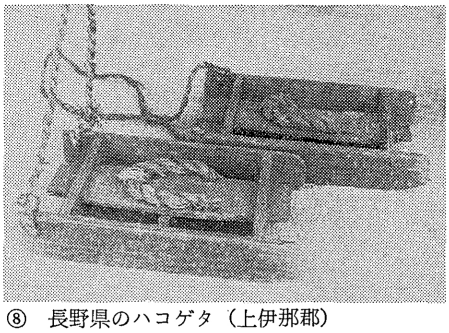
⑤ 岐阜県国府町のオーアシ



⑥ 静岡県賀茂郡下河津のオーアシ



⑦ 長野県のハコゲタ



⑧ 長野県のハコゲタ（上伊那郡）

シロフミ田下駄の諸形態